イギリス英語圏における家族像
− *true* と *real* で探る FAMILY カテゴリーの成立条件−

山田　仁子

Critical Features of Being a Family in the Culture of British English
- Analysis of *True Family* and *Real Family*-

Hitoko YAMADA

Abstract

This study aims to show how the conceptual category of FAMILY has been adjusted in British English user's minds, and to clarify the critical features that work to form the FAMILY category in the culture of British English. Two English words of *true* and *real* often claim that something is a 'true' or 'real' member of a category. This means that these two words work to confirm the nature of the category. *True* and *real* represent the two kinds of dynamic forces which form categories in the cognitive process of categorization: "centripetal force," which pulls something toward the center of a category, and "distinguishing force," which puts something inside the boundary of a category. When a person notices that something has the "salient" feature as a member of some category, the "centripetal force" begins to work. In her or his mind, this force pulls it toward the center of the category, often as its prototypical member. When a person tries to set some "standard" to be a member of some category and acknowledges that something meets the "standard," the "distinguishing force" begins to work. In her or his mind, this force puts it inside the boundary of the category as its member. These classified members need not to be prototypes of the category, though they can be ones.

This paper collects and examines combinatory expressions of *true* or *real* and *family* in their contexts from the UK texts in the corpus of *WordBanksOnline*. Close examination will reveal the cognitive process of FAMILY categorization, and "salient" features and "standard" features to be a *family* in the culture of British English.

【キーワード】: カテゴリー化, 英語, true, real, family, 文化, イギリス

序

本研究では、イギリス英語圏における言語使用の場で、FAMILY という概念カテゴリーがいかに形作られ調整されているのか、その過程を詳細に分析し、カテゴリーの形成と調整において重要な働きをするほどに FAMILY カテゴリーにおいて重要視されている性質がどのようなものであるか明らかにしていく。

英語という言語の日常的使用場面において概念カテゴリーが形作られ調整を受けている事を示すものとして、ここでは *true, real* という二つの語に注目し、*true, real* が *family* と共に用いられる例を収集分析した。*true, real* は、名詞の前につけて限定用法で用いられる場合、その名詞をラベルとするカテゴリーにカテゴリー成員として何らかの事物が確実に属することを示すために用いられる事が多い。*true, real* を用いる話し手や書き手は、無意識であるにせよ、何らかの事物をカテゴリーの中へ組み込もうとしているのである。この時、話し手や書き手の意識の中で、カテゴリーの姿は改めて確認されることになっている。

Barsalou(1983,1993), Lakoff(1987)などカテゴリーについて論じた研究の多くでは、語彙化したカテゴリーについて、共時的には安定したものと捉えて論じている。Barsalou(1983)は例えば「ピクニックに持っていくもの」といったように、語彙化していない、発話されたコンテクストに依存するカテゴリー（アド・ホック・カテゴリー）が新しく生成し、語彙化したカテゴリーと同様の性質を持つことについて論じているが、語彙化したカテゴリーについては既に生成されかつ安定したものとして扱っている。また Barsalou(1993)では、一つのカテゴリーから表出する概念については、その柔軟性を指摘しているが、カテゴリーそのものについてはやはり安定したものとして扱っている。Lakoff(1987)ではカテゴリーを、そのラベルとなる語が表すことのできる様々な概念を含む集合体として捉えており、表出される概念はコンテクストにより異なるが、カテゴリー自体はやはりそれらを全て含む安定したものとして扱っている。これらの研究に対して、MacLaury(1995)(2013)が提唱する Vantage Theory は、次の引用部分に記されるように、人がカテゴリーを形成し、使用し、変化させ、あるいは記憶から呼び起こす方法の型を提示しており、つまりはカテゴリーの柔軟さを前提としている。

> Vantage Theory is a model of categorization. Precisely, it is a model of the method that a person employs to construct any category, to use it, to change it, or merely to recall it from memory. (MacLaury(2013), p.67)

ただし MacLaury は、言語体系を構成するものとしての語彙化したカテゴリーの議論にとどまっており、いったん成立したカテゴリーがその後も変容する現象については触れていない。今回、本稿では、カテゴリーが語彙化した後も安定したものではなく、動的に柔軟に変容していることを明らかにする。実際の言語使用の場面において、言語使用者が置かれている状況や思考判断などを含むコンテクストによって、カテゴリーは絶えず見直され規定し直されているのである。

カテゴリーが調整を受けている事を示すものとして、英語においては *true* と *real* という２つの語を挙げることができる。*true*, *real* は、これに続く名詞をラベルとするカテゴリーの中へ何らかの事物を組み込む働きをするが、その働きは２通りに異なっている。*true* は事物がカテゴリーの「際立ち」の性質を持つことにより、その事物をカテゴリーの中心へと引きつける「求心力」として働き、*real* は事物がカテゴリーの成立条件となる「境界基準」の性質を持つことにより、その事物をカテゴリーの境界より内側へ入れ込む「分別力」として働く。カテゴリー化において働くこの２種類の力は、MacLaury が提唱する「類似性に向けられる注意」(Attention to Similarity)と「相違に向けられる注意」(Attention to Difference)という２種類の要素に似ているが、ここではより明確に、カテゴリーの姿を変容させる「力」として提示したい。

カテゴリー化において働く「求心力」が向かうのはカテゴリーの「際立ち」の性質であり、「分別力」が働く出発点となるのはカテゴリーの「境界基準」である。よって、*true*, *real* という２つの語が用いられる状況を分析すると、この２語に続く名詞が表す概念カテゴリーについて、その「際立ち」と捉えられている性質と「境界基準」と捉えられている性質とが明らかになる。本研究では、*true family*, *real family* という表現が用いられるコンテクストをイギリス英語のコーパス資料から収集分析することにより、「家族」(FAMILY) カテゴリーの「際立ち」の性質と「境界基準」を探る。これにより、イギリス英語圏における「家族」(FAMILY) の社会的位置づけが明らかになることが期待される。

本稿では１章で、*true*, *real* という２つの語が、概念カテゴリーを形成しようとする力を反映する事実が、FAMILY カテゴリーのみならず成立する事を確認する。また同時に、カテゴリー変容における *true* と *real* の働きの共通点と相違点を明確にする。

次に２章で、*true*, *real* に *family* という名詞が結びつく表現を、その前後のコンテクストと共にコーパスから収集し分析する。使用コーパスは主に

Collins 社が提供する *WordBanksOnline* とし、補足的に British National Corpus(BNC)を利用した。ただし、英語の種類によって結果が異なる可能性もあるため、今回は検索範囲をイギリス英語に限定した。その結果、イギリス英語圏における家族像が浮き彫りにされることになった。

１章 *true*, *real* とカテゴリー形成

1-1. カテゴリー形成に対する *true*, *real* の共通点

どのような語にも複数の用法が存在する。*true*, *real* も例外ではないのだが、その中に、カテゴリー形成に深く関わる用法がある。次に挙げる例の内(1)と(2)の *true*, *real* はカテゴリーには無関係で、それぞれ後続する名詞の内容について真実であることや現実であることを述べているだけだが、(3)と(4)の *true*, *real* は話題の事物が *true* や *real* に後続する名詞のカテゴリーに確実に入る事を主張している。[1]

(1) Based on a <u>true</u> story, this film shows the beginnings of the Danish Resistance during the Second World War.
(2) I don't want to lose you because I know you're good and actually we need people like you, people with a solid PR background. People who've worked in the <u>real</u> world.
(3) … the <u>true</u> poetry does not lie in but in between the lines.
(4) Cash is <u>real</u> money to your subconscious mind, whereas a credit card slip is not.

(1)では映画の元となった物語の内容が真実であることを *true* が主張しており、(2)ではこの文の聞き手 *you* が働いてきた世界が現実的なものであることを *real* が表現している。これに対して(3)では *poetry*（詩）の内容の真偽性が問題なのではなく、POETRY カテゴリーにおいて最もよい成員として含まれる詩であること、POETRY カテゴリーを代表するようなカテゴリー成員であることを *the true poetry* が表しており、(4)では *cash*（現金）が MONEY（金銭）のカテゴリーに確実に含まれることを *real money* という表現が表している。

true にも *real* にも辞書に共通して“rightly so called”（*Oxford Dictionary of English*）という意味用法の記述が見られる。これはつまり *true* や *real* に後続する名詞をラベルとするのが相応しいと主張する用法であ

[1] 例文においては、論じる上で重要な箇所に適宜下線を施した。

る。言い換えれば、こうした用法で用いられる *true* や *real* は、話題の事物が後続する名詞のカテゴリーに成員として確実に含まれることを明示する表現なのである。

(3)で *the true poetry* とされるものは文字に現れないところで伝わる *poetry* であり、文字に書かれた *poetry* よりももっと真に *poetry* と呼ぶに相応しいものであるとしている。つまり POETRY カテゴリーの中心への成員組み込みが見られるのである。

(4)の例では、話題となる *cash*(現金)は *real money* という表現により、*money* と呼ぶに相応しいものとして主張され、MONEY(金銭)カテゴリーの成員として含まれることが明示される。一方、*a credit card slip*(クレジットカードの伝票)は MONEY (金銭)カテゴリーから排除される。この時、*a credit card slip*(クレジットカードの伝票)は排除して *cash*(現金)を正当なカテゴリー成員とする MONEY (金銭)カテゴリーが形成されている。

true と *real* にはそれぞれ複数の意味用法がありながらも、共に何らかの事物をカテゴリーにそのカテゴリー成員として組み込むという用法を持つということが、以上の議論より明らかになった。ただし、カテゴリーへの組み込み方には異なる点が見られる。この *true* と *real* の相違点については、次の節で論じる事とする。

1-2. カテゴリー形成に対する *true, real* の相違点

true と *real* は、前節で述べたように、共に何物かについて何らかのカテゴリーの中に組み込む働きを持つが、その組み込み方まで同じというわけではない。*true* は話題の事物をカテゴリーの重要な「際立つ」性質を持つものとして、カテゴリーの中心的成員として位置づけるが、一方 *real* の方は、話題の事物をカテゴリーの「境界基準」となる性質を持つことにより、カテゴリーの境界より内側に位置づける。*real* の使用は、境界より内側にあるという点だけを重要視したものであり、客観的にそのものの性質を観察した時にカテゴリーの中心的成員となれるほどの「際立ち」の性質を備えているかいないかといったことには全く関知しない。

true と *real* のカテゴリー形成に対する相違点を具体的に示すために、ここで BLUE カテゴリーについて取り上げる。具体的には *true blue* が用いられる場合と *real blue* が用いられる場合とで、BLUE カテゴリーがどのように形成されているかを検討する。

まず *true blue* という表現は、話題となる物の色が、BLUE カテゴリーの中

心的成員となるべき色、つまり最も blue らしい blue の色にほぼ一致することを主張する。次の例(5)にある宝石ラピスラズリの青は濃いはっきりとした青色であるために、BLUE カテゴリーの色として「際立つ」色にほぼ一致する。その結果ラピスラズリの色は *true blue*、*the truest blue* と表現される。これに対してラベンダーの花の青色は、淡い色であり BLUE カテゴリーの色として「際立つ」色からはほど遠い。その結果ラベンダーの花の色は、(6)にあるように *true blue* ではないとして *not true blue* と表現される。

(5) It was lapis lazuli, the truest blue he had ever seen, and it seemed that the colour would last for all eternity.
(6) Roses are red ; lavender is not true blue.

(5)(6)の２つの例においてその話者は、BLUE カテゴリーにおいて「際立つ」色、blue らしい blue の色を思い浮かべている点では一致している。

ここで注意すべきなのは、(5)のように *true* が最上級の形で用いられ得る点と、(6)のように *not true blue* と言ってもこれが *false blue*、つまり BLUE カテゴリーに含まれない色を表すわけではない点である。*true* という語は *false* の対義語として用いられる事も多く、特に論理学では命題について真(true)か偽(false)かという二つの値のどちらかを取るものとして扱い、この真(true)か偽(false)という二つの値の間にあいまいな値は許されない。しかし Ariel(2010, pp.264-271)が心理学的なアンケート調査の結果をもって示したように、人間の意識においては「真実さ」に段階性は存在し得る。実際にことばが発せられる時にも、*true* は段階性を伴って用いられることが可能なのである。BLUE カテゴリーに含まれると判断される色の中でも特に blue らしいとイメージする色に近いことを *true* は表しており、この理想の blue に極めて近い場合には(5)で見たように *the truest blue* と最上級が用いられることもある。フェルメールが描く『真珠の耳飾りの少女』の髪を飾るターバンのように鮮やかなラピスラズリの青は、BLUE カテゴリーの中心に最も近く位置づけられる最上級の blue として(5)では認められているのである。一方、特に blue らしいとは言えないが blue と捉えられるラベンダーの花の色は(6)で *not true blue* と表現され、blue らしさが低く BLUE カテゴリーの中心的成員ではないことが示される。しかしこのラベンダーの淡い青色は、*false blue* として BLUE カテゴリーから排除されるには到っていない。BLUE カテゴリーの成員としてとどまっているのである。

次に *real blue* について考察する。*real blue* は話題となるものの色が BLUE カテゴリーの境界より内側にあることを主張する。この時話者に特に意識されているのは、BLUE カテゴリーの中心と言える最も blue らしい blue の色ではなく、blue 以外の色との境界、つまり *blue* と呼べるかどうかといった BLUE カテゴリーの境界である。

例えば生育する土地の性質によって赤やピンクから水色や青色に変化するあじさいの花の色について語る時、赤やピンクでなく水色や青色が見られるという状況では、赤と青の境界が強く意識される。この境界よりも青の側に属する色であると判別されることが重要な意味を持つ。次の例(7)ではこのような状況で *blue* と呼べる色が現れることを伝えるのに *real blue* という表現が用いられている。咲く花の色が BLUE カテゴリーの境界より内側に属することを *real* が主張している。

(7) In very acid soils some macrophylla and serrata types produce real blue, the same plant on neutral or alkaline soil can be pink or red.

true と *real* のカテゴリー形成における働きは、それぞれ次の図１、図２のようにまとめられる。ここで円はカテゴリーの枠を表しており、この内側に置かれることはカテゴリーの成員として認められることを示す。

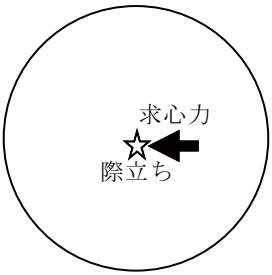

図１：*true* に反映するカテゴリー形成

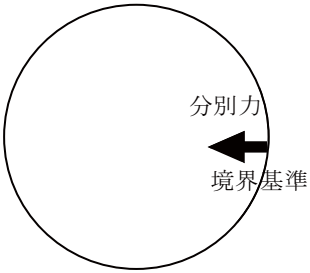

図２：*real* に反映するカテゴリー形成

true は話題の事物がカテゴリーの「際立ち」の性質を備えると話者が意識する事で生じる「求心力」により、その事物をカテゴリーの中心に位置づけようとするカテゴリー形成の力を反映している。また、*real* はカテゴリーの成員たるべきカテゴリーの「境界基準」を満たすと話者が意識する事で生じる「分別力」により、話題の事物をカテゴリーの内側へと振り分けようとするカ

テゴリー形成の力を反映しているのである。[2] [3]

次の(8)は BNC コーパスから収集した例だが、*true* と *real* の両方が現れており、２種類のカテゴリー形成がこの一つの文の中に見られる。

(8) If you have found true friends, you have real treasure. (BNC)

(8)の *true friends* は、この友人が FRIEND カテゴリーの「際立ち」の性質を充分に備える存在であることを示し、*real treasure* という表現はこの人物が、その貴重さゆえに *treasure* と言ってよい存在であり、TREASURE カテゴリーの成員として TREASURE カテゴリーにも組み込まれ得ることを表現している。(8)の *true friends* は、*you* として登場する人物との間に深い「信頼関係」などの FRIEND カテゴリーとしての「際立ち」の性質を十分に満たしているような人物と考えられる。重要な「際立ち」の性質への「求心力」の存在を *true* は示しているのである。また、こうした性質を備える理想的な友人は、「価値がある」という TREASURE カテゴリーの「境界基準」を満たすと認められる事で、普通の人間ならばカテゴリー成員となることのない TREASURE カテゴリーにその成員として組み込まれることになる。TREASURE カテゴリーの「境界」を越えてカテゴリーの中へと位置づける「分別力」を *real* が示しているのである。

以上の考察から、*true* と *real* は、何らかの事物をカテゴリーの中へと組み込む働きを持つことでは共通しているが、その組み込み方には明確な違いがあ

---

[2] カテゴリー形成に働く２種類の力については山田(2010)(2012)も参照の事。

[3] Lakoff(1987)において、*real* はカテゴリー構造を示す重要な鍵となる語として用いられているが、カテゴリーについても *real* についても本論とは異なる捉え方がなされている。Lakoff が論じるカテゴリーは一言語を成立させている語彙体系を成す「語彙カテゴリー」であり、この種のカテゴリーにはカテゴリーのラベルとなる語が当該言語において表し得る全ての意味用法が含まれる。異なる意味用法は Lakoff が提唱する ICM(Idealized Cognitive Models)に対応する。Lakoff は *real* がその複数の ICM から一つを選び取る表現であり、複数の ICM からカテゴリーが構成されている事を証明すると論じている。本研究では、カテゴリーは言語使用場面において言語使用者の「意識にあるカテゴリー」として捉える。また *real* の“rightly so called”という意味を考慮するならば、*real* はカテゴリーのラベルとなる語によって呼ばれるに相応しい成員だけを表すことになる。例えば一つの語 X が表し得る意味用法が複数あったとしても、この中から一つを選んで *real x* と表現したとすると、この選択された意味用法に当てはまるもののみがカテゴリーX に含まれ、その他の意味用法にあてはまるものはこのカテゴリーX から排除されることになる。この言語使用場面において言語使用者の意識では他の意味用法は存在せず、選択された一つの意味用法のみが「意識にあるカテゴリー」X を形成するのである。

ることが明らかになった。

２章　FAMILY カテゴリーの形成

この章では、イギリス英語圏において FAMILY カテゴリーがどのように形成されているのかを、*WordBanksOnline* コーパスから収集した例により分析する。コンテクストにおいてカテゴリーがいかに流動的にアド・ホックに形成され変容しているのかが明らかになる。

true family という表現がどのようなコンテクストで用いられるかを観察する事により、*family* として重要で「際立つ」性質と捉えられている性質が明らかになり、また *real family* という表現がどのようなコンテクストで用いられるかを観察する事により、*family* として認められるための「境界基準」と捉えられている性質が明らかになる。*family* という語をラベルとするカテゴリーの、重要な「際立ち」の性質と「境界基準」となる性質を、結びつく *true* と *real* を手がかりに明らかにしていく。

2-1. FAMILY カテゴリーの際立ちと求心力

WordBanksOnline のイギリス英語のデータ中に *true family* の例は４例見られたが、そのうちの３例において FAMILY カテゴリーの重要な「際立ち」の性質として、グループを成す人間同士の「結束」が意識されており、ただ１例のみで「血縁」関係の度合いが「際立ち」の性質とされていた。表にまとめると次の表１となる。

結束	血縁
3	1

表１　FAMILY カテゴリーを形成する「際立ち」の性質

次の(9)は「結束」を「際立ち」の性質とする FAMILIY カテゴリーが観察される例の一つとなる。

(9) … for six brief weeks we were a family, interdependent. We needed each other to simply survive. We were a working unit and we learned some new relational skills. “Who is my mother and who are my brothers?” With this question Jesus points out that <u>true families</u> are not only biological families.

(9)では、血縁関係のない人間同士がお互いに協力し合い必要とし合う関係を成立させており、こうした「結束」した人々の集団を *true family* であると主張している。「結束」という family として「際立つ」性質を強く意識することによりこの性質への求心力が生まれ、「結束」という「際立ち」の性質を中心に FAMILY カテゴリーが成立している。

「結束」という性質は次節で *real family* の *real* に反映する「境界基準」になる性質としても挙げられるが、カテゴリーにおける働きがそれぞれ異なる。*true* に反映するカテゴリーの「際立ち」として働く場合には、カテゴリー境界をめぐる対比がなく、*real* に反映するカテゴリーの「境界基準」として働く場合には、カテゴリー境界をめぐる対比が見られる。(9)の例の中には *true families* に対して一見対比する存在かと思われる *biological families* という表現が現れるが、*not only* という表現からも分かるように、この *biological families* は FAMILY カテゴリーから排除されてはいない。カテゴリー境界をめぐる対比はここには見られない。*biological families* については、FAMILY カテゴリーの中に留まる可能性は否定されず、ただ FAMILY カテゴリーの重要な「際立ち」の性質を備えていない可能性もあることが伝わるだけである。

true family の検索結果４例の内残る１例において FAMILY カテゴリーの「際立ち」の性質は「血縁」だった。「血縁」という性質は次節で見るように *real family* が用いられる際の「境界基準」になる場合が多いのだが、コンテクストによっては *true* に反映される FAMILY カテゴリーの「際立ち」の性質として意識される可能性もあることをこの例は示している。次に挙げる例(10)である。

(10) <u>Families</u> regularly and repeatedly intermarried in Afghanistan, where the term cousin covered a multitude of possibilities. His <u>true family</u>, parents and two young sisters, had been killed in their beds by a stray Soviet mortar shell when he was ten.

(10)の例ではアフガニスタンにおいて *family* と呼ばれる人間の集合体が何組もの婚姻によって血縁関係を築いていることが記述されている。広く血縁関係が成立し *family* と呼ばれる存在が多く見られる状況で、両親と兄弟姉妹で構成される集合体は「血縁」において最も良くこの条件を満たす存在として認識される。FAMILY カテゴリーの「際立ち」の性質として「血縁」が意識されこ

の性質への求心力が生まれている。「血縁」関係が社会に広く存在する状況において、「血縁」の有無は *family* と *family* 以外を区別する「境界基準」にはなり得ない。ここでは「血縁」という性質は「際立ち」の性質として機能し、これを中心に FAMILY カテゴリーが成立しているのである。

以上の考察により、イギリス英語圏において FAMILY カテゴリーは、その「際立ち」の性質として、FAMILY としての理想的な性質と捉えられる「結束」が設定される傾向が強いと判断される。ただし、今回見つかった用例数は少ないために、更なる調査が必要であろう。また *true family* という表現が、次の 2-2 で考察する *real family* という表現に比べても使用頻度がきわめて低いことから、英語圏における FAMILIY は、段階性を認める理想的な性質よりも、その有無により明確にグループ分けできるような基準となる性質によって成立する傾向にあると言うことができる。

2-2. FAMILY カテゴリーの境界基準と分別力

WordBanksOnline のイギリス英語のデータに見られる *real family* の例は *true family* よりもかなり多く、38 例あった。*family* が *real* と共起する場合に示される FAMILY カテゴリーの「境界基準」となる性質は、多いものから「血縁」15 例、「結束」13 例、「家族構成」10 例、に分類された。表にまとめると次の表２となる。

血縁	結束	家族構成
１５	１３	１０

表２　FAMILY カテゴリーを形成する「境界基準」の性質

「血縁」「結束」「家族構成」を FAMILY カテゴリーの「境界基準」とする例を以下に(11)(12)(13)として挙げる。

(11) Brett was adopted by a middle-class family from Hampshire. … Maybe he was ashamed of his <u>real family</u> …

(12) “Who do you think’s going to be there to help you if you get into trouble?” he said. “We’re the only <u>real family</u> you’ve got, baby. The only people you could turn to if things got nasty.”

(13) … Put up for adoption at the age of five, … he grew up trying to fit in with his new family …. “I still see my real Mum,” he says. “But we never had any money

and she thought it was best I was brought up with a real family, with brothers and sisters.

(11)で Brett という人物は養子縁組されており、養父母との家庭を持っている。この養父母との家庭と対比する捉え方により、実の父母との結びつきは *real family* と呼ばれ、「血縁」を「境界基準」として設定した FAMILY カテゴリーに組み込まれている。

(12)では「血縁」による家族が存在するのだが、話し手はこの「血縁」による家族を FAMILY カテゴリーから排除し、頼れる「結束」した仲間たちを FAMILY カテゴリーに組み込もうとする。「結束」という「境界基準」を選択した FAMILIY カテゴリーの、境界よりも内側に組み込もうという意図が *real* という表現に反映している。前節で FAMILY カテゴリーの「際立ち」として機能した場合と異なり、「結束」という性質がその有無により、FAMILY カテゴリーの内と外に成員を分別することになっている。

(13) でも *real Mum* と呼ばれる血縁による母がいる状況ではあるが、「兄弟姉妹がいる」という「家族構成」が「境界基準」に設定されることにより、養子縁組された家庭の方が FAMILY カテゴリーに組み込まれている。血縁関係のある母と子のまとまりは、ここでは「血縁」が「境界基準」として選択されていないが故に、FAMILIY カテゴリーから排除される。

カテゴリーの「境界基準」となる「家族構成」について注目すべき点は、コンテクストにより更に種類が分けられるということである。(13)では「兄弟姉妹がいる」点が重要な意味を持つ「家族構成」であったが、次の例(14)では「夫婦にとってその子供がいる」点が重要視されており、また例(15)では「子供にとって父と母の両親が揃っている」ことが重要視されている。

(14) This baby we're bringing into the world. We are going to be a real family.

(15) She said then that the permissive society of the 1960s had created a breakdown in what she called real families and a growth in the number of one-parent families.

(14)の話し手は、子供が生まれたら自分たちは *family* になるのだと述べている。子供の有無が FAMILY カテゴリーの内と外を分けている。「夫婦にとって子供がいる家族構成」が「境界基準」となっているのである。(15)に登場する *she* が *real families* とするものは後続部分に現れる *one-parent families* に

対比して用いられていることから、両親が揃っている *families* のことだと読み取れる。「子供にとって父親と母親が揃う家族構成」が「境界基準」となっているのである。

更に、*real* が反映するカテゴリーの「境界基準」として見られた３種類の性質、「血縁」「結束」「家族構成」は、３種類いずれもそれぞれに１０例以上見られた。このことは FAMILY カテゴリーを規定する性質が、コンテクストにより交替しやすいものであること、更には FAMILY カテゴリーが変容しやすいものであることを示している。FAMILIY カテゴリーの「境界基準」そのものは、コンテクストに存在する話し手書き手の意識に生じるものであり、聞き手読み手の解釈においても前後のコンテクストから判断されることになる。

2-3. FAMILY カテゴリーの変容

FAMILY カテゴリーの「際立ち」や「境界基準」が意識される時、FAMILY カテゴリーの中心的性質や枠が明確になり、そのコンテクストに依存したアド・ホックな FAMILY カテゴリーが形成されることになる。そしてこの意識された「際立ち」や「境界基準」を満たす事物はこのカテゴリーに成員として組み込まれる。この後 FAMILY カテゴリーの「際立ち」や「境界基準」が設定し直される時には、FAMILY カテゴリーはその内容や形が変容する。同時にカテゴリーの成員の入れ替えも起こる事になる。

次の例(16)(=(9))では、FAMILY カテゴリーの「際立ち」が新たに意識されることで、カテゴリーの変容が起きている。

(16)(=(9)) … for six brief weeks we were a family, interdependent. We needed each other to simply survive. We were a working unit and we learned some new relational skills. “Who is my mother and who are my brothers?” With this question Jesus points out that <u>true families</u> are not only biological families.

「血縁」で捉えられることの多い FAMILY カテゴリーについて *Jesus* は、「自らの母とは兄弟とは」と問い直すことで、この「血縁」という「境界基準」を捨て去り、新たに「結束」という *family* が目指すべき重要な「際立ち」の性質を提示している。「血縁」という「境界基準」で形成される FAMILY カテゴリーから「結束」という「際立ち」に向かう「求心力」で形成される FAMILIY カテゴリーへと、自らの意識においても聞き手の意識においても変容させているのである。これに伴い FAMILY カテゴリーの成員も組み替えられることになる。

「血縁」が成立する集団のみが成員であったものが、カテゴリー変容の後には、「血縁」を満たす集団であっても必ずしも成員になるとは限らないことになる。「結束」の強い集団が中心に位置する FAMILY カテゴリーが出現する。(18)で起きるカテゴリーの変容は次の図３のように表せる。左の円の実線に対して右の円を破線で描いたのは、始めの段階（t_1）で強く意識されていた FAMILY カテゴリーの枠が後の段階（t_2）ではあまり意識されなくなることを表している。

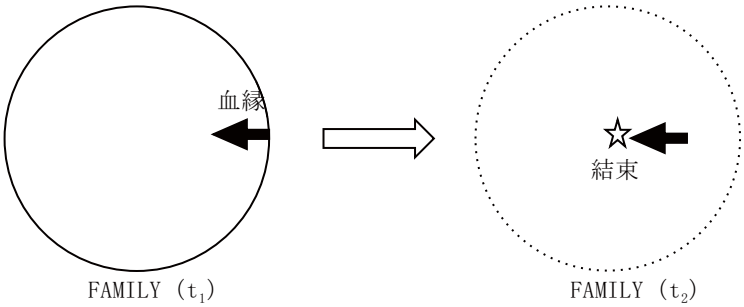

図３カテゴリーの変容(1)

次の例(17)(18)(19)(20)では、FAMILY カテゴリーの「境界基準」が設定され、FAMILY カテゴリーの枠が明確になることでアド・ホックなカテゴリーが形成され、話題の事物がこのカテゴリーに成員として組み込まれている。(17)における *becoming*、(18)における *made … into*、(19)における *turning into*、(20)における *going to be* といった表現は、何らかの事物が新たにカテゴリー成員としてカテゴリーに組み込まれる変化が起きていることを示している。

(17) Cyd had hung balloons on the front door, and it filled me with gratitude and love. She was waiting for us as I paid the driver, wreathed in smiles. As I dragged Pat's suitcase up our garden path she crouched down and threw her arms around him and felt like <u>we were becoming a real family at last</u>.

(18) Mackenzie has <u>made the congregation into a real family</u> simply through preaching his way through the Testament.

(19) I couldn't recall another instance when my sisters both took my side at the same time, and opposing Mum. We were <u>turning into a real family</u>!

(20) This baby we're bringing into the world. We are <u>going to be a real family</u>.

(17)では書き手と再婚相手と書き手の息子の３人の間に愛情や感謝に基づく「結束」が生まれている。この「結束」を書き手が強く意識することにより、「結束」を「境界基準」とする FAMILY カテゴリーが成立し、３人は一つのまとまりとしてこの FAMILY カテゴリーに成員として組み込まれる。(18)では Mackenzie と言う人物が聖書を説く事で人々をまとめていく。やはり「結束」という「境界基準」を持つ FAMILY カテゴリーが成立し、説教を聞くために集まった人たちはこの FAMILIY カテゴリーに成員として組み込まれる。(19)でもそれまでまとまることのなかった姉妹が初めて一致協力するという「結束」が意識されることにより、「結束」を「境界基準」とする FAMILY カテゴリーが形成され、話し手とその姉妹がこのカテゴリーの成員として組み込まれる。(20)では子供が生まれるという状況の中で「家族構成」が特に意識され、これを「境界基準」とする FAMILY カテゴリーが成立する。話し手書き手とパートナーとその子供の３人はこのカテゴリー成員として組み込まれる。

いったん設定された FAMILY カテゴリーの「境界基準」が設定し直される場合もある。するとこの基準の再設定に伴って FAMILY カテゴリーも変容する。FAMILY カテゴリーの内容も、これまで成員であったものが排除され、新たな事物が成員として組み込まれる事態となる。次の例(21)では、話し手の意識の中でこうした変化が起きている。

(21) “When you summoned me upstairs and referred to Bessie as my daughter … it was as if <u>what I believed to be a real family was no more than self-delusion</u>.”

(21)の話し手の意識の中で元々あった FAMILY カテゴリーは「血縁」を「境界基準」とするもので、この種のカテゴリーのままでは再婚相手の娘 Bessie を加えた集団は FAMILY カテゴリーの成員とはなり得ない。だが再婚相手がその娘 Bessie を話し手の娘(*my daughter*)と呼んだことによって、彼女の意識の中で FAMILY カテゴリーの変容が起きる。それまでの「血縁」という「境界基準」は放棄され「結束」という「境界基準」が新たに設定される。新たな「境界基準」を枠とする新たな FAMILY カテゴリーが成立する。そして話し手と再婚相手とその娘の３人の集団は、この新たな FAMILY カテゴリーの成員として認識されるに到るのである。このカテゴリーの変容は次の図４のように表せる。三角の印は話し手と再婚相手とその娘の３人から成る集団を表す。円の実線は成立しているカテゴリーの枠を表し、破線はカテゴリー成立までには到っていないが一つの共通する性質を満たす集合を表す。

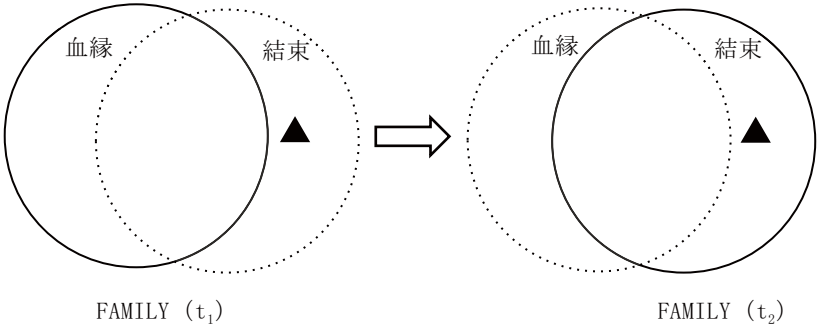

図４カテゴリーの変容(2)

(21)の話し手の意識には当初「血縁」を「境界基準」とする FAMILY カテゴリーが存在しており、このカテゴリーに対して３人の組み合わせは、成員として組み込まれることはなかった。この状態を図４の左部分が表している。しかしその後話し手の意識の中で FAMILY カテゴリーに変化が起きる。FAMILY カテゴリーは「結束」を「境界基準」とするものに変容するのである。そして話し手と再婚相手とその娘の３人の組み合わせは、この新しい FAMILY カテゴリーにその成員として組み込まれることになる。

次の(22)でも FAMILY カテゴリーの「境界基準」が設定し直されている。その結果ここでもそれまで FAMILIY カテゴリーに入っていなかったものが、新たに FAMILIY カテゴリーに組み込まれている。

(22) We stayed together because we chose to stay together. In a world full of choices, we chose each other. ‘There’s the baby,’ I told Eamon. ‘That’s the thing that really brought us back together. This baby we're bringing into the world. We are going to be a real family. Maybe we were already.’

「境界基準」が子供のいる「家族構成」から愛情ある絆「結束」へと設定し直される。(22)の前半では、「子供がいる」という「家族構成」が FAMILY カテゴリーの「境界基準」となっている。ここに登場する語り手は、自分とパートナーの間に子供がいないために「家族構成」という「境界基準」により FAMILY カテゴリーから自分たちを排除する。子供が生まれれば FAMILY カテゴリーに入ることになると捉えている。しかし後半ではこのカテゴリーの「境界基準」を設定し直す。「家族構成」ではなく「結束」こそが FAMILY カテゴリーの「境

界基準」であるとして、子供が生まれる前の段階であっても自分たちは FAMILY カテゴリーに組み込まれるべきものであったと、カテゴリー成員を組み替えるのである。FAMILY カテゴリーの枠組みもそこに含まれるカテゴリー成員も、コンテクストに置かれた言語使用者の認識の変化に従って変容し組み替えられている。

上に見てきたように、カテゴリーはこれを認識する人の意識の中で状況に応じて変化するが、認識する人物が異なればそれぞれの意識の中で形成されるカテゴリーも異なる可能性がある。次の例(23)はこの可能性を示している。

(23)(=(15)) She said then that the permissive society of the 1960s had created a breakdown in <u>what she called real families</u> and a growth in the number of one-parent families.

(23)に見られる *real families* には “what she called” という但し書きが付いている。この但し書きは、*she* の指示する人物の意識において *real family* と認められるものが、(23)の文の書き手の意識においては *real family* と認められない可能性を示唆している。この例における *real family* が *one-parent family* と対比して用いられていることから、*she* の意識における FAMILIY カテゴリーは「両親が揃っている」という「家族構成」をその「境界基準」とすることが明らかである。これに対して(23)の文の書き手は、この FAMILY カテゴリーがあくまで *she* の認識であることを示唆する。書き手の意識においては異なる「境界基準」が選択されている可能性が高い。*she* と書き手の２人の意識においては、異なる「境界基準」を設定する異なる FAMILY カテゴリーが存在していると考えられる。

結局カテゴリーとは、コンテクストにおいて言語使用者がその意識内に形成するものであることを次の例(24)は明確に示している。

(24) Soon this modern family would be even more complicated, full of half-brothers and stepsisters and stepbrothers and halfsisters and step-parents and blood parents. But now I finally saw that it was up to us if we felt like <u>a real family</u> or not. Nobody else mattered. The labels they stuck on us meant nothing at all. There was <u>a real family</u> here if we wanted it.

(24)の書き手は血縁の程度も様々に、複雑に入り交じった家族の可能性を示し

た上で、最終的に *real family* として FAMILY カテゴリーの中に組み入れられるかどうかは、当事者の意識次第とする。「血縁」が絶対的な「境界基準」になるわけではないとしているのである。「family のように感じる」「family でありたい」という気持ちから独自の FAMILY カテゴリーの「境界基準」を設定し、そのカテゴリーの中に自分たちが属すると判断すれば、たちまちその人たちは FAMILY カテゴリーの成員たる *family* になる。言語使用者がコンテクストにおいて設定する「境界基準」によってカテゴリーの枠が決定し、アド・ホックなカテゴリーが形成されるのである。

以上の考察から、イギリス英語圏における FAMILY カテゴリーの枠を成立させる「境界基準」とされやすい性質としては、第一に「血縁」があること、続いて「結束」していること、家族としての「構成」を成していること、の３種類が選択される傾向が明らかになった。またこの内家族としての「構成」の内容は「子供にとって兄弟姉妹がいる」「夫婦にとって子供がいる」「子供にとって父親と母親がいる」と異なるものが見られた。更には、同一話者であっても、その意識の中で FAMILY の「境界基準」は入れ替えられる現象が見られた。カテゴリーの「境界基準」は決して固定したものではなく、コンテクストにより、また話者の意識の変化により、柔軟に入れ替えられ、これに従ってカテゴリーの姿も容易に動的に変容するのである。

結語

本研究では、イギリス英語圏における言語使用者の意識の中で、FAMILY カテゴリーがコンテクストの変化に応じて変容する過程を分析した。その結果から認知語用論的なカテゴリー化のメカニズムが明らかになり、またイギリス英語圏の社会文化において FAMILY（家族）がどのように捉えられているかについてその傾向を知ることができた。

カテゴリーは、カテゴリーの中心的な「際立ち」の性質に向かう「求心力」と、カテゴリーの枠を明確にしようとする「境界基準」をめぐっての「分別力」によって生成され変容する。状況によって、カテゴリーの中心的な「際立ち」の性質が特に意識される場合もあれば、カテゴリーの「境界基準」が特に意識される場合もある。また、カテゴリーの「際立ち」の性質や「境界基準」となる性質は、そのカテゴリーのラベルとなる語が発話されるコンテクストに応じて、言語使用者により取捨選択される。カテゴリーはコンテクストにおける言語使用者の意識の中で、柔軟に変容し作り替えられるのである。

コンテクストを構成する要素の一つに、言語使用者が生きる社会文化が含ま

れる。社会文化ごとに選択されやすいカテゴリーの性質は異なる。今回分析したイギリス圏の英語資料はイギリス英語圏における FAMILY カテゴリーについて、その性質を明らかにすることになった。

イギリス英語圏における FAMILY について、「求心力」を生み出すカテゴリーの「際立ち」の性質として選択されやすいのは「結束」だった。このことから、イギリス英語圏における家族に求められる理想的性質は、「結束」しているということであると判断される。もっとも、今回の分析では、*true family* の例は多くは見つけられなかったので、イギリス英語圏における家族の理想像を語るには、更なる調査研究が必要とされるだろう。

true family に比べて *real family* の例はかなり多く見られた。このことは「際立ち」の性質よりも「境界基準」となる性質の方が、FAMILY カテゴリー形成の際に意識される場合が多いことを示している。ただしこれはカテゴリー化全般について見られる傾向である可能性があり、今回の研究だけを根拠に FAMILY カテゴリー特有の現象であると結論づける事はできない。今後更なる検証が必要ではあるが、求心的に理想像を求めるというよりも、何らかの基準となる条件を満たすか満たさないか明確に区別することで家族像を捉えることが多いと言うことはできるだろう。

イギリス英語圏の FAMILY カテゴリーについて「境界基準」として選択されやすいのは、「血縁」「結束」「家族構成」であることが明らかになった。最も多く選択される基準は「血縁」ではあるが、「結束」「家族構成」もこれに迫る頻度で見られた。「結束」という条件は「求心力」が目指す「際立ち」の性質としても見られたが、この「結束」があるかないかで *family* であるかどうかを判別するという見方をする場合には、「分別力」の出発点としての「境界基準」に「結束」という性質が選択される。また、「家族構成」はその FAMILY カテゴリーに含まれるのに必要とされる人員構成が、コンテクストにより異なっており、イギリス英語圏に固有一定のものは存在しないようである。「子供にとっての兄弟姉妹」の場合もあれば、「夫婦にとっての子供」の場合もあり、また「子供にとっての父親と母親」の場合も見られた。「家族構成」は現実に生きる一人の人間の人生の観点から見ても流動的に変化するものであることから、人生において関わる人間のどの組み合わせが FAMILY カテゴリーの成員となる条件を満たすものであるのかについては、言語使用者により、また言語使用場面により変化すると考えられる。家族として認められる人員構成は、社会的にも文化的にも変化していく。個人的、社会的、文化的変化にともなって、FAMILY カテゴリーの「境界基準」として設定される「家族構成」の

中身も変化すると考えられる。

イギリス英語圏に生きる英語使用者の意識において、FAMILY カテゴリーは日々刻々と流動的に動的に変容している。カテゴリーにとって「際立ち」の性質を重要視することもあれば、「境界基準」となる性質を重要視して選択することもある。また「際立ち」や「境界基準」として設定する FAMILY カテゴリーの性質も、発話場面や発話者の個人的な生活の変化により、更には発話者が属する社会の変化、文化的価値観の変化などにより変化する。

今回のイギリス英語における FAMILY カテゴリーについての分析の結果は、山田(2013)で見た日本語の「家族」カテゴリーと比較すると、興味深い共通点と相違点が見られる。日本の「家族」の場合には、「求心力」が目標とする「際立ち」の性質が人間同士の結びつき、つまり「絆」と言えるような「結束」であったが、これは今回イギリス英語の FAMILY カテゴリーにもほぼ同様に見られた点である。しかし一方、「分別力」が出発点とする「境界基準」の性質については、相違点が目立つ。日本語の「家族」カテゴリーの「境界基準」が「血縁」ばかりであったのに対して、イギリス英語の FAMILY カテゴリーの「境界基準」は、「血縁」に劣らぬほどの頻度で、「結束」や「家族構成」といった性質が選択されていた。日本語圏もイギリス英語圏も、「家族」に求める理想的な性質が「結束」である点では一致しているが、「境界基準」とする性質を見る限り、日本語圏よりもイギリス英語圏の方が、「血縁」のみに縛られない他の多様な価値観で成立する「家族」の存在を許容する社会文化、あるいは、「血縁」に替わる価値を求める社会文化であることを、今回の研究は示している。

参考文献

Ariel, Mira. (2010) *Defining Pragmatics*, Cambridge University Press, Cambridge.

Barsalou, Lawrence W. (1983) “Ad Hoc Categories,” *Memory and Cognition* 11, 211-227.

Barsalou, Lawrence W. (1993) “Flexibility, Structure, and Linguistic Vagary in Concepts: Manifestations of a Compositional System of Perceptual Symbols,” *Theories of Memory*, (ed.) by Collins, Alan F., Susan E. Gathercole, Martin A. Conway and Peter E. Morris, 29-101, Lawrence Erlbaum Assoc., Hove.

Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*: *What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press, Chicago.

MacLaury, Robert E. (1995) “Vantage Theory,” *Language and the Cognitive*

Construal of the World, (ed.) by John R. Taylor and Robert E. MacLaury, 231-276, Mouton de Gruyter, Berlin.

_____ (2013) "Vantage Theory in Outline," *Vantage Theory: A View on Language, Cognition and Categorization*, (eds.) by Glaz, A. Moist, M.L. and Tribushinina, E., 66-136, Cambridge Scholars Publishing.

山田　仁子 (2010) 「カテゴリーを形成する 2 種類のベクトル, -「真(ま) + 色彩語彙表現」の分析 -」, 『徳島大学総合科学部言語文化研究』, Vol.18, 115～130 頁

_____ (2012) 「カテゴリー化を促す 2 種のベクトル － Real Mother と True Mother」大橋浩 他 編『ことばとこころの探求』, 開拓社

_____ (2013)「家族」に関する日本語語彙のカテゴリー化」, 『徳島大学総合科学部言語文化研究』, Vol.21, 81～106頁

Oxford Dictionary of English 2nd edition (2003) Oxford University Press.

例文の引用

British National Corpus (BNC)
(http://bncweb.lancs.ac.uk)

WordBanksOnline:English, HarperCollins Publishers Ltd. (2008)
(http://wordbanks.harpercollins.co.uk)

本研究は JSPS 科研費 25370554 の助成を受けたものである。